

就活用語

内定・内々定

大学卒業後に就職することを、企業と約束する労働契約のこと。日本経済団体連合会の倫理憲章により、最終学年の十月一日以降でなければ、「内定」を正式に出すことができないため、それ以前の「内定」を「内々定」として区別している企業が多い。内々定は、最終学年の四月一日以降でなければ出すことができない。だが、倫理憲章に賛同していない企業のなかには、四月一日以前に「内々定」を出す企業もある。

エントリーシート (ES)

企業が独自に作成した応募書類のこと。企業は多くの学生の中から、企業の利益に貢献してくれそうな学生を採用する。よりよい人材が欲しいからと言って、応募者全員と面接を行うことは、物理的に不可能である。よって選考の第一段階として、エントリーシートで学生をふるいにかける。履歴書とは別物。

インターンシップ

学生が在学中に自らの専攻、将来のキャリアに関係した職業体験を行うこと。春から九月の夏休みまでに集中しているが、冬のインターンシップもある。一部の外資系企業では冬のインターンシップが採用と密接に関係する企業もある。応募が多い企業では、エントリーの段階でエントリーシートを書かせ、書類選考や面接を行うこともある。

文系就職

文系大学や学部の学生が数多く応募する分野への就職、自分の専門研究分野以外への就職を指す。

学校推薦

東工大の場合、いくつもの企業から各専攻に推薦依頼があり、学内で希望者を募って選考を行い、大学や専攻の就職担当教員、指導教員など、大学関係者が推薦する。本面下部の学校推薦についての記事を参照。

自由応募

企業が出す求人に対して、自分で直接応募すること。就職情報サイトや志望企業のHPなどで、情報を集めたりし、自由に行きたい業界や企業を選ぶことができる。文系学生のほとんどが利用する。※自由応募をメインに就職活動をする場合も専攻の就職担当主催の学校推薦に関する説明会には出席するのが望ましい。

後付推薦

学校推薦ではなく、自由応募で企業の採用選考を受けているにも関わらず、選考途中や内々定後に推薦状の提出を求められること。自由応募が途中で学校推薦に代わってしまうケースである。自由応募では、複数の企業を受けることも、複数の内々定をもらって辞退することも法的な制限はない。しかし、推薦状を提出して内々定や内定が決まってしまうと、学生の都合で辞退することはできない。一般的に自由応募の方が学校推薦よりも採用選考の時期が早いので、自由応募のつもりで応募・内々定した後で後付けで推薦状の提出を求められて対応に悩むケースもある。

セミナー・説明会

企業が事業内容や業績、理念などの情報を直接学生に紹介する情報提供の場。直接社員の方から仕事や職場のことについて話が聞け、業務内容を詳しく知ることができる。開催形式は多種多様で、代表的なものには、企業が単独で開催するもの、一つの会場に複数の企業が集まって行うものなどがある。

学校推薦を利用した就職について

企業による採用選考の基準が不透明であることや不況の折、内定が取れずに何度も面接を受けることになるのではないかと不安に思う人、志望する企業から専攻へ推薦依頼が来ている人にとっては、魅力的な制度である。最大のメリットは自由応募と比べ内定率が高く、選考期間が短いことである。本学の学校推薦は専攻または専攻ごとに受け付けているので、推薦を希望する場合は早いうちから選考の就職担当者に専攻内のスケジュールを確認しておくことよ。企業によって様々ではあるが、内定枠には推薦枠一つに対して受験者一名、数名程度の人数制限が設けられている。

学校推薦の流れとしては、およそ一〜三ヶ月ごろに専攻の就職担当主催による説明会が行われ、後日専攻内で希望者の中から選考が行われる。選考方法は専攻や企業によって異なり、就職担当教員による選考だけでなく、企業が面接を行う場合もある。学内選考に通った学生への学校推薦の推薦状は四月一日以降に発行される。その後企業の採用試験が順調に進んだ場合、四月〜五月頃に内々定がもらえることになる。

学校推薦で応募して内々定が出た場合、学生側の都合で辞退することはできない。企業と大学との信頼関係を損ない、大学の就職担当、企業の採用担当者、そして後輩に多大な迷惑をかけるためである。ただし、一社の推薦試験で不採用になった場合は専攻に残っている別の企業の推薦を受けることは可能である。なお、自由応募の応募段階では、選考プロセスの途中や内々定後に推薦状の提出を求められることがあるが、その場合、推薦状を提出したとき、それ以降の内定辞退はできなくなるので注意が必要である。

一般的には推薦を活用した就職は減少してきているが、東工大キャリアアドバイザーの印象では他校と比較して推薦のメリットは大きく、東工大生のみを対象とした追加募集の案内などもあるという。ただし学校推薦を用いる際、以下のことに留意すべきである。考えもなく就職を学校推薦で済ませようと考えていると、手痛い目にあう可能性がある。入社し実際に働いて、考えていた業務内容と違うと後悔するかもしれない。

そのために本学にその企業が自分に合った企業かどうかを自由応募の場合と同様、自己分析や企業研究をしっかりとやる必要がある。自分から行動をおこして自分の目で企業をしっかりと見極め、納得できる企業に就職したいものである。研究などでスケジュールが過密である可能性が高いが、忙しい実験の合間を縫ってでも企業について調べる努力が必要となる。

学校推薦は就職の先にあるものを考えて活用すべきであり、特別な事情がない限り希望していた就職先を妥協して学校推薦に安易に頼るものではない。だが、メリット・デメリットを考慮した上で利用する価値はある。

博士進学を考える

近年の東工大生の博士課程進学者は、修士課程修了者の約一割にあたる。こういった通常の進学者とは別に、東工大には博士一貫教育プログラムや清華大との大学院合同プログラムという制度があり、これらによって博士号学位取得を目指す学生もいる。これらの制度にはそれぞれ特色があり、前者は博士号を三、四年で取得し、高い技術力を持った若い世代を社会に送り出そうというものだ。後者は東工大と清華大を行き来しながら研究を行い、両大学の学位を取得しようというものである。他にもインターンシップや海外研修を必修としていたり、企業による支援があったりと、就職に有利な一面もある。ただ、これらの制度に参加できる学生はコースごとに数名程度である。

博士は就職に不利とよく聞かれますが、本当にそうなのだろうか。そういわれている理由としては、専門性が強い、社会性を欠いている、年をとっている等が挙げられるが、そもそも社会性がなければ修士、修士であるうと採用はされなない。専門的な分野しかやらないことが問題であって、専門性が強いことは博士学生にとって強みだといえる。求人にしても、博士を拒絶しているわけではないが、博士をどうしても採りたいというわけではないので自分からアピールしていく必要がある。これら以外にも博士の就職は、求人案件が少なく、一般的な就活のタイミングが分らないため、自分から動くことがより重要だといえる。

東工大には若手研究人材の育成を目的とした、プログラクティブリーダー養成機構(以下PLIP)とよばれる機構がある。PLIPは博士後期課程学生、学位取得後5年以内のポストドクを対象にインベシヨンスキルアッププログラムと呼ばれる独自の実践プログラムやPLIP連係企業等への三ヶ月以上からなる長期滞在型インターンシップを行うことで就職に直結するように学生を支援している。以上のことから、博士の就職に限らず、修士、学士に対しても共通して言えることは、いかにして企業に自分を売り込むか、アピールできるかが大切といえる。

自己分析

～時々自分が何者かわからなくなる～

自己分析は、自分を分析する事によって、気付かなかった性格や価値観を浮き彫りにし、自分が向いている職業・業種・企業を判断することを目的として行われる。また、企業に自分がどういった人間なのかをより正確に伝える事もできるようなる。学部一・二年生も今から自己分析をしても決して早くない。自己分析をすることによって、将来就きたい企業に入るために自分に何が足りないか、何が足りないかを知ることもできるため就職を控える大学生、大学院生は自己分析を常日頃からする必要が有ると言えるだろう。また自己分析を早くにしない就職すると、入社したはいが本来自分が想像していたビジョンとは違うと感じ、早期退職してしまうことにもなりかねない。

そこで自己分析のやり方をいくつか挙げたい。一つは自己分析を書くことだ。ルーブリックにでも大学ノートにでもなんでもいい。ただし、歴史の年表のように「高二の時にインターハイに出場し準優勝」のようにただ結果だけを書くのではなく、「準優勝で周りからはすごいと言われたが、あと一歩で優勝だったのですごく悔しかったから、た

くさん練習した」と、自分が思っていたことをどんどんと掘り下げていくことが重要である。自己史を書き連ねていくうちに、その時々自分が何を考えて行動し、何を信条にしてきたかが自然に浮かび上がってくるだろう。

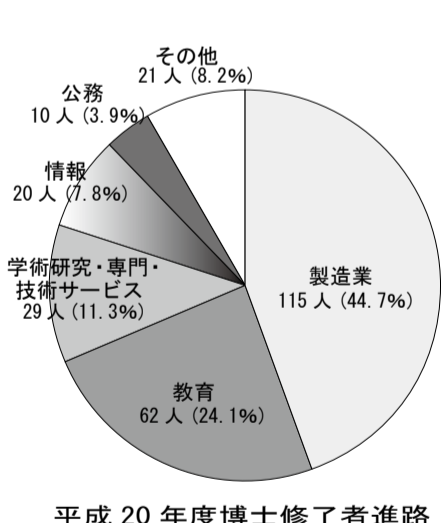
自己史で過去の自分を知った後は現在の自分を知る必要がある。現在自分はどのような状況にいて何を学んでいる、何に興味があるのかを知ることにより、どのような企業に入れば自分が活かせるかが分かるだろう。現在の自分が終わったら次は未来の自分が終わったら次は未来の自分が終わる。将来自分が何をしたいのか、どう生きていきたいかを書いてみて将来像をイメージするのだ。

また、過去・現在・未来と順に分析するのではなく、自己史を書く前にまず将来の自分をイメージするやり方もある。そうすることで自分は〇〇であるからこの仕事は向かないなどといった考え無しに、将来の選択肢を増やすことができるからだ。

そうは言っても、先に述べたような自己分析にとっつきにくいという方には、自己分析シートを書くことをお勧めする。自己分析シートは書籍として売っているものもあればネット上でダウンロードできるものもある。自己分析シートは上記のような質問が用意されているので、誰でも簡単に自己分析ができる。

中には自己分析を全くせず就職しようとする人もいるよすが、それではその企業に入る理由や自分の性格の説明に一貫性が無くなってしまい、まず相手にされないだろう。エントリーシートや面接でも、その企業を受ける確固たる理由が自己分析を通して見つかったなら、自分の言葉に迷うことは無いはずだ。

学校推薦は就職の先にあるものを考えて活用すべきであり、特別な事情がない限り希望していた就職先を妥協して学校推薦に安易に頼るものではない。だが、メリット・デメリットを考慮した上で利用する価値はある。



平成20年度博士修了者進路